

安曇川流域の
昭和期の林業とイカダ(筏)流し

1. 材木の伐採から搬出まで
安曇川流域は奈良時代以前から、杣(そま)と呼ばれた材木の産地として知られ、河川や琵琶湖の水運を利用して奈良や京の都へ建築用材を供給してきました。最も長く続けられた運搬手段としてはイカダによる流送です。
立木の伐採はスギでは50～60年生、ヒノキでは80年生くらいのが標準とされ、土用の頃に行われました。斧とノコギリを用いて切り倒した原木は、4～5mの長さで玉切りして集積され、秋まで山中で乾燥させた後、ソリに乗せてキンマ(木馬)道という棧道や雪を利用して引き出したり、谷川を堰き止めて発生させた鉄砲水を利用して、本流の川岸まで搬出しました。
戦後、材木の搬出方法は大きく変化し、伐採現場から張られた鉄製ワイヤーにロープウェーのように材木を吊り下げて道路際まで搬出(架線による搬出)し、トラックに積み込むなどの改良が行われました。また、昭和40年頃には斧とノコギリに代わってチェーンソーが使われるなど機械化が進みました。しかし肉肉なことに、その頃から安価な外国産の材木が大量に輸入されるようになると、国産材の価格も暴落し、安曇川流域の林業は基幹産業の座を下りることになりました。

2. イカダの組立てと流送
大川と谷川の合流点付近には、ドバやオオドとよばれる作業場が設けられ、そこでイカダに組立てられました。イカダの基本構造は、材木を2.5mほどの幅に横並びにして、マンサクの木で作った縄(ネソ)で結束したものを1連といい、上流域では5～6連、中流域からは8～10連を縦に連結しました。
イカダには筏乗り(筏師)が通常3人ほど乗り込んで、カジ棒(ネジキ)とコブシの木で作った棹を用いて巧みに操作しました。筏乗りは危険をともなう仕事であったため、報酬は一般の山仕事の3倍になったといわれ、昭和前期の山間地においてはあこがれの職業の一つでした。
筏乗りたちは難所を乗りきるために色々な工夫をしました。イカダの航行をスムーズにするために、川の深淺や岩石の除去をして流路を確保したり、刻々と変化する川の状態を情報交換するのに便利のように、瀬・淵・岩に名前をつけました。現在、記録されているものだけで約200ヶ所の名前がありますが、かつてはこの数倍もあったといわれます。

3. イカダ流しの終幕
1200年間の長きにわたり行われてきたイカダ流しも、昭和10年代後半頃から衰退期を迎えます。水力発電用ダムの建設、道路整備にともなうトラック輸送や鉄道敷設による貨物輸送の発達、イカダ流しの著しい衰退を招きましたが、これに拍車をかけたのが日中戦争と太平洋戦争です。多くの若者が軍隊に応召されたために、筏の乗り手がいなくなるとともに流路が荒廃してイカダの航行に支障をきたしました。そして、戦後間もない昭和23年(1948)、安曇川水系におけるイカダ流しは廃絶しました。



「しこぶちさんのむかしばなし」に登場する「中野の赤壁」と思われる場所です。この辺りの川岸の岩は赤っぽい色をしており、まさに「赤壁」です。江戸時代には「赤岩運上所」があった場所とも考えられています。また、この赤壁の少し上流の長尾には「御雲石」という岩場があります。この岩の上にはかつて御雲神社が鎮座していましたが、現在は安曇川が見える山の斜面に祀られています。

荒川の水力発電所が建設される際、取水のための高岩堰堤(ダム)には夜専用の流筏路が設置されました。主流の側から発電用水を導入するトンネルが1.1kmにわたって開き、その中を通過した筏は発電所横に設けられた「筏落し」というスローになった流筏路を流下します。流筏路の入口付近の底部には上下する水門とローラーがついた「ソロバン落し」と称する装置が設けられました。「ソロバン落し」の水門は筏が接近してくると水門が下がり、ローラー上を筏が通過して流筏路に入るようする装置で、筏の通過をスムーズにする工夫でした。これによって大正10年(1921年)に荒川発電所が稼働し、夜は朽木深谷の難所を過らなくてもよいこととなりました。

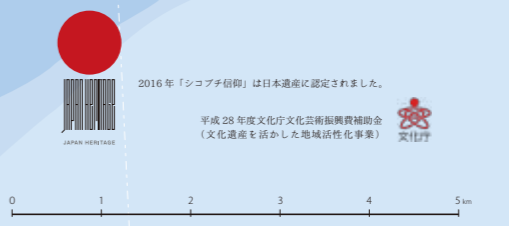
鉄砲堰(てっぽうせき)の跡と思われる石積みが残っています。鉄砲堰は熊の谷川と「県立自然公園・フナ原生林」を流れる谷川の合流点「九津(このつ)」の下手110mに設置されています。石積みの上に材木を組んで堰を造り、満水時に水門を開けて発生した鉄砲水で筏を下させました。ここは、琵琶湖・淀川の水源地であり、フナ原生林には水源地の標柱が建てられています。



「しこぶちさん」のむかしばなし

むかしむかし…朽木(くつき)村のいかだ師「しこぶちさん」が山から伐り出した木を「いかだ」に組んで息子と川を下っていると、「続が原の日ばさみ」という所で岩の角に当たって立ち往生してしまいました。「これは困った…」ふと気づくと、そこに乗っていた息子の姿が見当たりません。川に眼をやると一匹のカップが息子を小脇に抱えて川底に引き入れようとしているではありませんか。「おまえはだれや!」「わしは人の生き血を吸うて生きてるカップの川太郎や。」「しこぶちさん」は息子を救おうと竿(さお)でカップの川太郎をこらしめ、大事な頭の皿を割ってしまいます。「これからはもうしあへん。」カップの川太郎はさすがごと退散します。

いったんはしおらしくあやまったカップの川太郎でしたが「しこぶちさん」が中野の赤かべという所へ下ってきたとき、ふたたび川底から「いかだ」を押さえて航行を邪魔します。かんかんに怒った「しこぶちさん」はカップの川太郎を完膚なきまでに打ちのめします。「堪忍(かんにん)してください。これからは菅笠(すげがさ)にガマの脚半(きゃはん)をはいて辛夷(こぶし)の竿を持っているいかだ師さんには手を出しません。」その誓いのしるしに持っていた杉の枝を逆さに突きさしました。「しこぶちさん」は哀れに思って、カップの川太郎を許してやります。その逆さに立てた杉の木から枝が出て安曇川町中野の大きな「さかさ杉」になったそうです。「しこぶちさん」は「川のワルモノ」を退治してくれる強い神さま」として、川沿いのお宮さんに祀られるようになったということです。



2016年「シコブチ祭」は日本遺産に認定されました。
平成28年度文化庁文化芸術振興補助金(文化遺産を活かした地域活性化事業) 文化庁

『読みがたり滋賀のむかし話』(滋賀県小学校教育研究会全国部編・日本標準発行)から要約

安曇川リバーマップミニ 調査・企画・編集・発行: 安曇川流域文化遺産活用推進協議会、高島市文化遺産活用実行委員会
2017年3月1日発行

